



講演Ⅱ

「視点をかえれば宝の山

～夢をかたちに～」

水尾 衣里

名城大学 人間学部 人間学科 教授

【自己紹介】

愛知県出身。名古屋大学大学院工学研究科建築専攻博士後期課程単位修得満期退学。

工学博士（東京農工大学）。

名古屋女子文化短期大学助教授から平成15年、名城大学人間学部 助教授になり、平成21年から現職。

日本建築学会、環境技術学会、日本エネルギー学会に所属。

国土交通省社会資本整備審議会委員、岐阜県高山市都市計画審議会委員、国土交通省中部地方整備局景観アドバイザーなどを務める。

【講演概要】

まちづくりを映画制作という観点から考えてみる機会があった。映画産業は一国の重要な芸術文化であるとともに世界に向けて情報を発信できるツールの一つであり、映画を通じて国家間の文化、芸術、社会の相互理解にも多大な貢献を果たし得る事業である。

今やコンピュータができることは日々増え続けおり、コンピュータやITの技術なしでは人間の生活は成立しない。映像の世界でも同様である。世に出されるすべての映像作品はコンピュータにより効果的な表現映像へと処理が施されている。コンピュータだけで制作される映画もある。実写では不可能な背景の描写や、人間の能力を超えたアクション等は観客を大いに喜ばせ興奮させる。こうした映像のほとんどはコンピュータを使わなければならない。それ故、無背景のスタジオで役者が演技をし、背景はCGで制作すれば実在の都市や施設を使ったロケやスタジオにセットを作りこんで撮影する必要などないのでは、とまで思った。しかし、実際に撮影された映像が観ている人々にもたすリアリティや風情は、CGで作られた虚像に代わるものにはなりえていない。映画制作において撮影現場の果たす役割は今後も大きい。

映画はどこで撮られているか。長きに渡りハリウッドにおかれていた日本映画であるが、2006年には公開本数の5割を占めるところまで盛り返しているものの、映画撮影所数は1970年当時に比べ半減しており、数少ないスタジオやロケに協力してくれる地域で撮影が行われている。最近では、ロケ地はその後の観光資源となることから誘致も盛んではある。自治体のイメージアップ戦略としてロケの協力を積極的に行い、実績を上げているところも多く、映像制作がきっかけとなり地元の人々はそれまで気にもとめてないものが、実は宝であることに気づかされている。成功している地域には共通点がある。

山形県庄内のスタジオセディックオープンセットは偶然にもある作品の撮影の支援をしたことが設立のきっかけとなったところである。今では日本一の大きなオープンセットとして有名になり、観光客も訪れている。まったく使い道がないと思われたどうしようもない荒地が、新しい可能性を見出され、さらに地域の人々の力で地域の宝となっていった事例を紹介する。